

## 協働のまちづくり推進計画検討委員会（第6回）会議録

日 時	平成22年9月28日（火）14：00～16：30
場 所	富里中央公民館4階大会議室
出席委員	久野直衛委員長，長徳實義副委員長，石井壽恵子委員， 加藤千春委員，小泉喜市郎委員，竹生勲委員，長谷正行委員， 二上正栄委員，鈴木勉委員，高澤忠彦委員，榊原孝委員， 長谷川敏彦委員，堀越等委員，森秀樹委員，片貝勝也委員 （欠席5名：大木寿美子委員，小林隆夫委員，荒野峰之委員， 斉藤榮子委員，新井正美委員）
アドバイザー	千葉大学法経学部准教授 関谷 昇氏
事務局	企画課企画調整室長，企画課企画調整室員
傍聴者	0名

### 〔会議次第〕

1 開会

2 委員長あいさつ

3 議題

（1）（仮称）協働のまちづくり推進計画について

・グループワーク

4 その他

5 閉会

〔 会議概要 〕

開 会	
委員長	<p style="text-align: center;">会議録確認委員の選出（長徳副委員長，鈴木委員）</p> <p style="text-align: center;">（ 1 ）（ 仮称 ）協働のまちづくり推進計画について</p> <p style="text-align: center;">～ 班に分かれ，グループワーク～</p> <p style="text-align: center;">（ 1 4 : 0 5 ～ 1 6 : 1 0 ）</p>
委員長	<p style="text-align: center;">途中の班もあるとは思いますが，本日の話し合いを通して，次回以降に向けてのアドバイスを頂戴したいと思う。</p>
アドバイザー	<p>各班でまとめたグループ案を提出するが，最終的には1つの計画にまとめるものなので，班で自己完結するという事に固執しなくてもいいと思う。それぞれ重複しているところもあるし，それぞれ連関させないと機能しない部分もあるので，「こういう視点がある」，「こういう目標でいくべき」あるいは「こういう手順でやっていくべき」ということを班ごとにまとめた意見を提出することでいいと思う。あとは，事務局が最終的に1つの案にまとめて，その後それぞれを連関させた形でどういうふうにしていくのかという議論していけばいいと思う。</p> <p>これから最終的に計画をまとめていくにあたり，いくつか今後に向けて留意しておく点がある。1つは，タイムスパンで，協働のまちづくり推進計画は，1年間で実行するものではなく，これから数年かけて推進していくという類の計画だと思う。来年度は具体的にどういうことができるのか。2～3年かけてどういうことができるのか。更にもう少し時間をかけてどの辺まで進めていけるのかというような中・長期的な展望，目標をある程度計画の中にしっかり明記し，その目標に向かってのタイムスパン的なものを意識してみるといいと思う。例え</p>

ば、小学校区単位の横のつながりをどう考えていくのかも、いきなり地域組織の再編をやってしまうと、いろいろな反発も出てくるし、実際機能しないところも出てくる。そういう意味では、まず既存の組織の運用状況、課題等も地域によってかなり違うと思うので、地域ごとに検証、課題出しをして共有していく。その中で何をしなくてはいけないのかという議論を一つ一つ組み立てて、その延長上に横のつながりが必要となるということであれば、どういう形がありうるのかという議論に結びついてくると思うので、大雑把にこういう段階を踏んだほうがいいというご意見があれば、その辺も盛り込んでおくといいと思う。行政固有の話となれば、行政は単年度での目標をかなり細かく設定し、予算をつけて1年後に徹底した評価、検証をやっているはずなので、行政目標としてどう立てるかというのは当然出てくる。最終的な計画は、それに耐えうるような計画でなければならぬと思うが、この委員会は市民会議の場でもあるので、市民の側から見てどういう目標を立て、どういうふうに段階的に実行していくのかという意見を出していくといいと思う。

それぞれの取り組みは、全部が有機的につながってこないと効果的な結果に結びついていけないので、それぞれの班から出てくるアイデアとか事業計画提案が、どういうふうにつながっていくのか。例えば、組織の話、担い手の話、具体的な事業展開の話が、全部バラバラでは効果が半減してしまう。例えば、ボランティア組織の話があったが、現在のボランティアセンターとの関係はどうするのか。ボランティアを推進していくということであれば、ボランティアを必要とする人をどういうふうに情報としてつなぐのか、ボランティアをしたい人をどうやって募っていくのかという問題がある。例えば、ボランティアを必要としている人は、センターを通じて、一定の情報、ニーズを集めていくということも必要だが、それだけでは足りない。いろいろな環境をいろいろな角度から開いていくことが必要になる。逆に、ボランティアをしたい人というのは、現在は、

登録制度でやっている。ボランティア登録という制度設計にしてしまうと、ボランティアをする人は限られてしまう。むしろ今出てきているボランティアは、登録型のボランティアよりも何かあったときに時間があるから、現場に駆けつけてボランティアをするというような一過性の特長のほうが多い。ボランティア活動を本格的にやるというよりは、今自分に協力する時間と体力があって、困っている人がいるからそれに対応するという形です。登録制度とは違った形でそういう人たちを巻き込んでいけるようなアイデアが問われている。そういうものも制度設計の中にうまく盛り込めると、どういう情報発信の仕方が必要なのか、どういうマッチングの仕方がありうるのか、いろいろなことが課題として出てくる。今後そういう話を全体の議論で更に詰められるといいと思う。

閉 会